

子どものよりよい育ちをともに考える  
ベネッセの情報誌

# これからの幼児教育

PDF版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

第1  
特集

## 子どもの未来につながる力を 幼児期から育む

東京大学大学院教授 **秋田喜代美** / 認定こども園あかみ幼稚園 (栃木県・佐野市) 園長 **中山昌樹** /  
みやざき保育園 (神奈川県・川崎市) 主任 **太田亜希**

第2  
特集

## 幼児期の「運動」は体だけでなく、 心も育てる

データ

## 「学びに向かう力」を育む 家庭の関わり

Webアンケートに  
ご協力ください。  
もれなく謝礼進呈  
詳しくはP.1をご覧ください。

2 第1特集

# 子どもの未来につながる力を 幼児期から育む

2 座談会

今、OECDなど世界が注目している  
「社会情動的スキル」とは？

東京大学大学院教授 秋田喜代美

認定こども園あかみ幼稚園（栃木県・佐野市）園長 中山昌樹  
みやざき保育園（神奈川県・川崎市）主任 太田亜希



10 事例

子どもの未来につながる、  
目に見えにくい「心」の育ちを  
見える化し、保護者と共有

認定こども園 せんりひじり幼稚園（大阪府・私立）

12

ベネッセ教育総合研究所・OECD共同シンポジウム  
今注目される「社会情動的スキル」について  
世界と日本の最新の知見を報告する  
シンポジウムを開催しました

14 データから見る幼児教育

「学びに向かう力」を育む家庭の関わり

18 第2特集

# 幼児期の「運動」は体だけでなく、心も育てる

18 インタビュー

幼児期における運動への関わり方が  
心身や知的な成長を大きく左右する

東京大学大学院教授 秋田喜代美

20 事例

一斉活動で体を動かす時間を確保しながら  
生活の中にも運動の要素を十分に取り入れる  
玉島幼稚園（大阪府・公立）



はじめに

今年度も4分の1が終わり、あっという間に真夏を感じる季節となりました。本号は3月に開催されたOECDとベネッセ教育総合研究所の共同シンポジウム「子どもの未来につながる社会情動的スキルとは？」をもとに特集を展開しました。幼児期に「社会情動的スキル」を育成する重要性が、世界的な共通認識になりつつあります。少し難解な言葉ではありますが、これからの幼児教育において重要な概念になっていくことが予想されるため、園長先生、そして保育者のみなさまに、最新の情報としてお届けさせていただきました。

本誌は4月から編集担当が変わりました。現場の先生により一層役立てていただける冊子を目指してまいります。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

『これからの幼児教育』編集担当 糸藤友子



WEBアンケートにてご意見・ご感想を募集しています（回答者全員に500円の図書カードの謝礼あり）。詳しくはHPをご覧ください。

ベネッセ これからの幼児教育 検索

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは  
全ての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ

2015年 春号 明日の保育につながる振り返り

2014年 秋号 保育の質を高める遊びの「理解」と「援助」

2014年 夏号 幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か

※本誌は最新号、バックナンバー等の追加発送は行っていません。



<http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/> または  で

※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

「これからの幼児教育」2015年夏号

発行人/山元倫明 編集人/渡邊恵子 発行所/(株)ベネッセコーポレーション 印刷製本/凸版印刷(株) 編集協力/(有)ベンドコ 執筆協力/二宮良太

撮影協力/ヤマグチイッキ、谷口哲 イラスト協力/アサマリカ

◎お問い合わせ先/「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング14F

0120-926-610 (通話料無料) 受付時間: 9:00 ~ 18:00 (土日・祝日・8/12 ~ 8/16・年末年始除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。 ※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6301へおかけください(ただし通話料がかかります)。

# 子どもの未来につながる力を 幼児期から育む

OECDが提唱する「社会情動的スキル」を幼児期に育成する重要性について、世界的な認識が高まりつつあります。では、社会情動的スキルとは、具体的にはどのような力を指すのでしょうか。また、どのように保育の中で育むことができるのでしょうか。座談会と具体的な事例を通して、子どもの未来につながる力、社会情動的スキルについて深く考えていきましょう。

## 座談会

## 今、OECDなど世界が注目している 「社会情動的スキル」とは？

社会情動的スキルは、従来の日本の幼児教育・保育をより向上させる大きなきっかけとなる概念と言えます。東京大学の秋田喜代美先生、並びに保育現場から園長先生と主任の先生が、社会情動的スキルを軸にして、これからの幼児教育について語り合います。

### 社会情動的スキルとは何か



東京大学大学院教授  
**秋田喜代美**  
あきた・きよみ

#### 今後、社会で求められる能力の土台となる目に見えにくい力

——本日はよろしくお願ひします。最初に「社会情動的スキル」とは何か、秋田先生に解説していただきたいと思います。

**秋田** まだ日本ではなじみが薄い言葉ですが、社会情動的スキルはOECD（経済協力開発機構）などが提唱している概念です。OECDは、これからの社会で、複雑な要求や課題に対応することができる力を「コンピテンシー（能力）」と定義していますが、近年、コンピテンシーは、知識や技能だけではなく、意思や意欲といった「情動的」な側面に支えられていると考えられるようになり

ました。こうした目に見えにくい力＝姿勢や能力などを測定し育成するために、社会情動的スキルという概念を設けたのです。OECDは、2030年における学校のあり方を検討していますが、その中で社会情動的スキルは、「態度（アティチュード）」のひとつとして、重視されています。

社会情動的スキルが対象とする範囲は広いですが、「目標の達成に向かう力」はそのひとつです。目標に向けて何かを成し遂げるためには、「これをやりたい」という情熱をもち続けたり、我慢してやり続けたりする忍耐力や自己調整も必要になります。さらにより大きな成果を生み出すためには、「他者との協力」も必要です。そうした人間関係を構築



認定こども園あかみ幼稚園  
(栃木県・佐野市)  
園長  
**中山昌樹**  
なかやま・まさき

するためには、社会性も大切ですし、相手に敬意や思いやりをもつことも重要です。またうまくいかないときにストレスに対処するために、「情動を抑制する力」も求められます。

社会情動的スキルの定義と測定は、OECDでも議論の最中にあります。こうした姿勢や能力が中心になるとお考えください（図1参照）。

#### 実は日本の保育が大切にしてきた「心情・意欲・態度」に近い

**太田** 最初に社会情動的スキルという言葉聞いたとき、大学の講義に出てきそうな感じがして、具体的な子どものイメージと結びつきませんでした。秋田先生の説明を聞いて、自分の中で、「がんばる力」「大人になるための根本となる力」「生きていく力」といった言葉に置き換えら

図1

幼児期から青年期に  
育みやすい

OECD発  
社会情動的スキルとは？

幼児期から育むことが  
将来につながる

#### 目標の達成

- ・ 忍耐力
- ・ 自己制御
- ・ 目標への情熱

#### 他者との協力

- ・ 社交性
- ・ 敬意
- ・ 思いやり

#### 情動の抑制

- ・ 自尊心
- ・ 楽観性
- ・ 自信

出典：OECD 資料（社会情動的スキルのフレームワーク）

社会情動的スキルに関する報告書（OECD 作成）は、ベネッセ教育総合研究所のHPで今年の夏以降、公開する予定です。 <http://berd.benesse.jp/>

れるのではないかと思います。

**秋田** その捉え方でいいのだと思います。社会情動的スキルという言葉はともかく、考え方は新しいものではありません。数年前、OECDの会議で初めて社会情動的スキルという言葉を目にしたとき、「これは日本の幼児教育・保育が大事にしてきたことだ」と感じました。日本が最も重視してきた「心情・意欲・態度」と重なるところが多いのです。

**中山** 具体的な子どもの姿を通して社会情動的スキルを考えると、「自身の存在を受容され、安心して外界に関わり、意欲に満ちている状態」をイメージします。秋田先生がおっしゃったように、これまで私の園でも、保育の中心に遊びをおいて、社会情動的スキルという言葉で表されるような力の育成を目指してきたと思います。

**太田** お話を聞いて、子ども自身からわき出る意欲をもとに活動をつくり上げることが、社会情動的スキルを育てるうえで大切ではないかと感じました。ふだんの保育では、例えば、工作コーナーには子どもが興味に応じて遊べるようにいろいろな素

材を用意し、さらに「こんなこともしたい」という声が聞かれたら、遊びが広がるように援助します。そのように子どもの気持ちからスタートして意欲を引き出す保育を通して、無意識のうちに社会情動的スキルを大切にしてきたのかもしれない。



みやざき保育園  
(神奈川県・川崎市)  
主任  
**太田亜希**  
おおた・あき

## なぜ今、社会情動的スキルが重視されているのか

### 子育て環境や社会の変化を受け 子どもに育てたい力がより明確に

**秋田** これまで大切にされていたにもかかわらず、今なぜ改めて社会情動的スキルが重要視されているかというと、海外の研究に基づいた新たな概念が発表されたことで、日本でも取り入れようとしているだけではありません。確かに日本は「心情・意欲・態度」を大切にしてきましたが、実際、十分に育っているかどうかと言えば話は別です。なかでも、年齢が上がると、挑戦したり、やり遂げたりする力に課題が見られる子どもも見られます。また、主要な社

会情動的スキルのひとつに協同する力がありますが、これは単に友だちと仲良く遊べればよいのではなく、異質な相手と折り合いをつけて、一緒に課題を追求するような姿を想定しています。そのように社会情動的スキルという考え方をもとに、改めて保育者がこれまでの実践を振り返ることに大きな意味があります。

**中山** その通りだと思います。この頃、就学直前の子どもを見ると、以前に比べて幼さを感じることがあります。「もう1年あれば…」と、焦りのような気持ちを抱くこともあります。おそらく、かつては社会情動的スキルとして表されるような力

が、自然に育まれる社会環境があったのでしょ。降園後に異年齢の集団で遊んだり、ご近所付き合いの中で地域の大人から叱られたり、地域コミュニティで社会情動的スキルが育っていたから、園はことさらに意識する必要がなかったのだと思います。

ところが、時代とともに地域社会のあり方が変化して、子どもの姿も変わってきました（P.5 図2・3参照）。これまで園が無意識に大切にしてきたこと、また当たり前と考えてきたことに明確な意味づけをして、保育や園運営に取り組まなければ、今後、立ち行かなくなりそうだという課題意識を抱えています。

**秋田** そうですね。目の前の子どもが社会に出る20年、30年後は、さらにグローバル化が進み、今以上に多様な文化背景をもつ人々の協働が求められる世界になるはずですから、異質な人やモノに適応する力を乳幼児期から育てる必要があるでしょう。今後の社会の中で、いかに従来の幼児教育のよさを生かせるかを考えるうえで、社会情動的スキルは重要な概念と言えるでしょう。



## 社会情動的スキルを伸ばすためのポイント

### 具体的な姿に落とし込んで 社会情動的スキルを育てていく

——次に社会情動的スキルを育てるために留意すべきポイントを教えてください。

**秋田** OECDでは、社会情動的ス

キルをどう育てるかという大きな枠組みをつくろうとしています。これは目の前の子どもに責任を負う保育者が実践すべきこととは別の話です。現場の保育者は、子どもの実態を踏まえて、「こういう子どもの姿を捉えたい」「このあたりに気をつ

けて保育をしたい」など、社会情動的スキルを具体的な子どもの姿などを自園ならではの言葉に落とし込んで考えるといいでしょう。その際には、社会情動的スキルという目に見えにくいものを、自分たちの言葉で「見える化」することが大切です。

## 日本の子育て環境の変化 平日、友だちより母親と遊ぶ子どもが増えている

Q. 平日、(幼稚園・保育園以外で)遊ぶときは、誰と一緒にいることが多いですか？

図2 幼稚園・幼児（平日一緒に遊ぶ人）

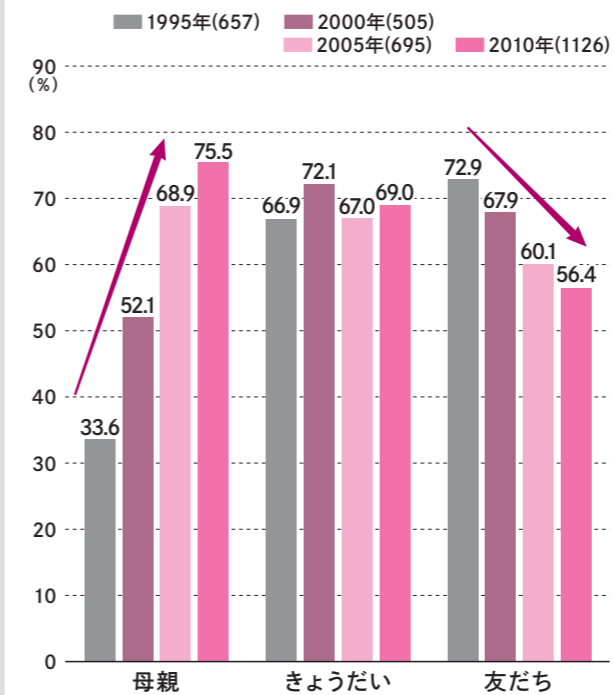
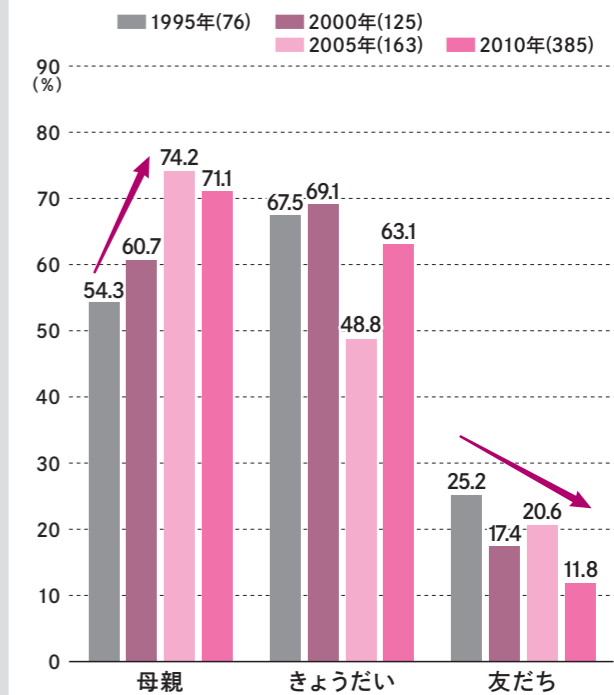


図3 保育園・幼児（平日一緒に遊ぶ人）



※複数回答。※「その他」を含む9項目の中から3項目を图示。※幼稚園・保育園に通う3歳11カ月～6歳11カ月の幼児。※（ ）内はサンプル数。

◎平日に子どもが降園後に遊ぶ相手は、「母親」が増加し、「友だち」が減少していることがわかります。保育園に通う子どもに比べ、降園後遊ぶ時間が多く取れる幼稚園児も、友だちと遊ぶ機会は減っています。背景には、少子化や遊び場の減少、遊びの内容の変化、また保護者の安全志向の強まりなどがあると考えられます。

出典/ベネッセ教育総合研究所「幼児の生活アンケート」

例えば、ある園では、子どもが没頭したり夢中になったりする姿を捉えるために、「『もう一回』と言える子どもを育てたい」という言葉を用いていました。子どもの姿から出発した、とてもよい表現だと思いました。自園ではどのような社会情動的スキルを育てたいかが決まったら、研修などを通して「こんな場面で育っている」「こういう援助をしたら乗り越えられた」といった具体的な事例を共有し、支援のあり方を考えてい

くといいでしょう。

**中山** 社会情動的スキルを育てるための「必修科目」は、生活の中の「遊び」だと思っています。どの子どもも思いきり遊びたがっており、遊びの中で困ったら大人の援助を得る権利をもっていると、私は考えています。保育者の側には、「こんな活動をしてほしい」といった願いに基づく環境構成がありますが、子どもにとって、そんなことは知ったことではなく、楽しく遊べればそれでいい

のです。保育者は、ねらいにこだわり過ぎず、少しでも遊びが充実し、子どもが探求する姿を見せるような努力を続けることが、社会情動的スキルを育むための大前提になるのではないのでしょうか。

**太田** 中山先生のお話から、子どもの気持ちをもとに遊びを進めることの大切さを改めて考えました。予定通りに活動が展開せず、子どもがまったく異なる遊びをしたがることは多々あります。もちろん、保育の

ねらいをもとに環境を準備することも大事ですが、それよりも、子どもの意欲を捉えて尊重したり、子どもと一緒に考えようとする姿勢が大事だと思いました。

### 充実した遊びや生活の中で結果的に身につけていく力

**秋田** 社会情動的スキルを育てようとするのではなく、いかに遊びを豊かにするかという視点をもつことが先決です。子どもが自信をもって安心して遊べるためには、保育者をはじめとした周囲があるまを受け止め、「この場所なら、自分を丸ごと出せる」と思える環境をつくるこ

とが大切です。そのために、保育者は一人ひとりの違いを認め、「あなたらしくあっていい」というメッセージを常に伝えましょう。逆に指示や禁止事項が多い環境では、子どもはその場を乗りきろうとすることしか考えません。

またOECDでは、大人になって社会に貢献し、幸せに生きるためには乳幼児期にどのような力を身につける必要があるかという、逆算の考え方で議論を進める傾向があります。私自身は、乳幼児期は大人になるための準備期間とは捉えておらず、そのときどきに子どもがいきいきと過ごすことを大切にし、結果的

に社会情動的スキルが育つという順序を大切にすべきと考えています。

**中山** 結果として身につくスキルという考え方は、とても重要だと思います。例えば、けんかは人間関係を学ぶ最大のチャンスです。けんかを通して、相手に気持ちが通じて仲直りする喜び、また自分の思いが通らないときの悔しさなどを体験し、「ひとり遊びもいいけど、友だちと遊ぶともっと楽しい」と実感し、協同性が豊かになり、しだいに役割分担もできるようになります。この中には社会情動的スキルと言われる力も多く含まれるでしょう。それは遊びの結果として得られるのであって、スキルの習得のためにけんかをするわけではありません。

**太田** けんかは大事だと思いますが、保護者の中には、とにかく「ごめんなさい」と言わせてトラブルの芽を摘もうとするかたが少なくありません。子どもには、謝ればOKではなく、いろいろな解決の方法があることを学んでほしいのですが。

**中山** 謝れることはすばらしいのですが、それを大人から強制されると、本当に悪いと思っていなくても謝るようになることには気をつけなくてはなりません。謝罪の言葉が緊張した場面から逃れるためのキーワードだと学んでしまうのです。そうした状況では、表面上は友だちとうまく付き合えていたとしても、社会情動的スキルは育たないでしょう。

### 文字・数などの認知的スキルと関連しながら総合的に伸びる

**秋田** 社会情動的スキルを育てるためには、文字・数などの認知的スキ

ルとの関係も理解しておく必要があります。一例として、編み物に夢中になっていた子どもの姿から説明しましょう。

編み物をするためには、まず編み方の知識がいりますし、全体のバランスを整えながら編んだり、どれくらいの時間を要するかを考えたりする必要があります。これらは、文字・数などの認知的スキルです。さらに、完成させるためには、コツコツと根気強く続けなくてはなりません。また、その子どもは保護者や担任の保育者にプレゼントしたいという思いに支えられてがんばっていました。こうした意欲や思いは、まさに社会情動的スキルと言えます。

編み物を完成させることができたら、達成感から自信がつくなどして社会情動的スキルが向上するでしょうし、編み物の知識や力も高まるはずで、このように社会情動的スキルと認知的スキルは、関連しながら伸びていくのです。毎日の生活の中にある遊びや活動が子どもにとって意味のあるものであれば、社会情動的スキルや文字・数などの認知的スキルは、総合的に育つと考えていいでしょう。

**中山** 今のお話は、経験上、とても納得できます。認知的スキルの代表

である文字や数は、ワークブックで勉強しなくても、遊びの中で自然と身につきます。お店屋さんごっこのリアリティを追求して文字を使って看板を書こうとしたり、ドッジボールで勝ちたくて人数を数えたりする姿が見られます。

**秋田** 知的な興味が発端となって社会情動的スキルが伸びることもあります。一例ですが、ある園の子どもと障がい者のかたとの交流では、車椅子への興味がきっかけとなって関係が深まる姿が見られました。

そのように園が地域社会へと活動の場を開き、異質な人やモノと交流する経験を豊かにすることで、子どもの学びは広がっていきます。幼稚園や保育園などは、学習指導要領に基づいて単元や配当時間が決まっている小学校以降とは異なり、地域に根ざした緩やかなカリキュラムを組み立てやすくなっています。幼児期に地域社会に入り込んで探求したり人と深く関わったりする経験などを通して、社会情動的スキルを十分に伸ばしておくと、小学校以降で社会情動的スキルや文字・数などの認知的スキルが雪だるま式に大きくなっていくこともわかっています。

**中山** 地域活動は本当に有意義ですね。地域の結びつきが強かった昔に

は戻れませんから、新たな形の地域コミュニティを再構築しようと、うちの園でも地域活動に重点を置いています。そのひとつである農業プロジェクトは、子どもと職員と地域の高齢者が協同し、大豆を育て、味噌を作るという活動です。地域のかたがたが園内で一緒に作業をしますが、そこで保護者や保育者とは異なる大人との関わりが生まれます。単に作業について教えられるだけではなく、ときには叱られるなど、感情面の交流もあります。そうした経験を通し、初めて子どもは地域のかたがたと共生していることに気づくのです。子どもには地域のいろいろな人を結びつける力がありますので、今後、子どもが中心にいる新たな地域コミュニティの再構築に努めるつもりです。

**秋田** そうした経験が地域に対する誇りにつながり、郷土を愛する気持ちが育つのでしょうか。身近な人とうまく付き合えるだけではなく、地域や社会に参画して貢献しようとする、いわゆるシチズンシップ（市民性）も、大きな意味で社会情動的スキルにつながると言えます。こうした学びは、個々の家庭では難しいので、今後、園として充実させていくことが期待されます。

### 小学校以降の教育改革とも関連する「社会情動的スキル」の重要性



ベネッセ教育総合研究所 主席研究員  
東京大学 客員准教授  
木村治生

現在、小学校以降の教育について、「知識・技能」の習得に加え、「汎用的能力」を重視しようという議論が進められています。汎用的能力とは、問題解決力や批判的思考力、コミュニケーション力、情報活用力、計画遂行力といった教科の枠組みを超えた力のことで、社会情動的スキルは、そうした能力のベースになっていると考えられます。

今の子どもたちはグローバル化や情報化が進む変化の激しい社会を生き抜くことや、少子高齢化、環境問題のような山積する難しい課題を仲間とともに解決していかなければなりません。そのため、学習活動では、教師が一方向的に指導する学びだけでなく、子どもが主体となって課題を見つけたら、その課題を友だちと解決したり、その成果をまとめて発表したりするといった学び（アクティブ・ラーニング）が積極的に導入されようとしています。また、大学入試でも、多様な能力を測定するために、論述や面談、グループディスカッションなど、従来のペーパーテストだけではない選抜方法が増えていくでしょう。

しかし、こうした能力は一朝一夕に身につくものではありません。これからの社会で不可欠となる汎用的能力を効果的に伸ばすためにも、幼児期から社会情動的スキルを形成していくことが望まれます。

### 社会情動的スキルを育てるうえでの課題

#### 目に見えにくい力について保護者に伝える難しさ

——社会情動的スキルを育てるうえで、どのような課題があるのでしょうか。

**太田** 目に見えにくい力の大切さについて、保護者の理解を得ることの難しさを常々感じます。例えば、みんなで絵を描く時間に「今日は描きたくない」という子どもの意思を尊重したくても、それは保護者にはな

かなか理解されません。日本人特有なのか、いわゆる横並びの状況に安心することが多く、例えばわが子の作品を他の子どものものと比べて、そのできばえに一喜一憂する様子が見られます。

**中山** 子どもの世界や保育の世界の言葉と保護者の考えには隔たりがあると考えて、きちんと「翻訳」して伝えることが必要だと思います。社会情動的スキルなど、目に見えにくいものはなおさらです。

私も若いときには、いろいろと失敗しましたね。入園してしばらくたった子どもの保護者を安心させようとして「園に慣れてきて、一日中、思いっきり遊んでいましたよ」と報告したら、「えっ、遊んでいただけですか?」と、逆に不安にさせてしまいました。その保護者にとって、遊びとは暇つぶしやレクリエーションくらいの意味だったんですね。絵画にしても、他の子と比べたり、大

人の視点から上手、下手を判断したりしがちですので、子どもが自分らしく表現することの大切さを保護者に何度も伝えていきます。

**秋田** 保護者は、園では常に多彩な遊びが提供されていると思いがちですが、実際はいくつかの遊びの連続ですよね。しかし、毎日、何気なくやっているように見える遊びは、子どもの中で着実に積み重ねられています。例えば、黙々と砂遊びをしていた子どもが、最後には左右対称のきれいな飾りつけを施した砂のケーキを完成させる。そういう遊びが、達成感ややり遂げる力につながるのだと思います。園は明るく楽しいだけでなく、実際には、つらかったり、

苦しかったり、もどかしかったり、子どもの多様な感情が生まれ、それらの経験を含めて成長がもたらされるのです。そうした保育のねらいについて理解を促すためには、園が子どもの預かり場所として機能するだけでなく、保育参加などを通し、保護者にも園の一員として関わってもらうことが有効でしょう。

**中山** 保護者に園の「身内」「味方」になってもらうことは大切ですよ。保護者と園の関係が、消費者とサービス提供者の関係にならないような戦略的な仕組みが必要だと思います。立場は異なりますが、目の前の子どもの幸せを願わない大人はいませんから、必ず一致して協力できるはずですよ。

実はうちの園は、20年ほど前に私が園長に就任したのを機に、現在の遊び中心の保育へと大きく転換しましたが、当初はなかなか保護者の理解が得られず、苦悩の時期が続きました。あるとき、子ども主体の劇を発表して「よい劇だった」と満足していたら、保護者アンケートで「内容がない」と酷評されました。それに対して詳しく反論すると、批判が倍になって戻ってきたのです。そしてどんな意見も、まずは受け入れることが対話の始まりだと学びました。

保護者との関係づくりは、一朝一夕にはいきません。「一緒に課題を解決しましょう」というスタンスで働きかけるうちに、しだいに苦情ではなく意見が寄せられるようになり、園運営の舵取りの方向性が定まってきました。社会情動的スキルというテーマに限らず、保護者との

関係づくりは、これからの園運営における最大のポイントのひとつだと思います。

### 常に保育のねらいを確認して 保育者間で保育観を共有

**秋田** 保護者に限らず、保育者間での保育観の共有も難しいテーマだと思います。太田先生の園では、その点で課題はありますか。

**太田** うちの園はもともと公立でし

たが、民営化された際にいろいろな価値観や保育観をもつ保育者が集まってきました。そのため、当初から園長は「みんなで話し合って園をつくり上げていく」という姿勢を貫いており、若手も自由に発言できる仕組みや雰囲気があります。例えば、話し合いの前にメールでテーマが送られてきて、あらかじめみんなが考えをメーリングリストで出し合い、話し合いで意見を出しやすくなって

います。そうした場でみんなが心を開いて考えを共有し、少しずつ同じ方向を向くようになってきました。

**中山** 私の園では、保育者の考えがぶつかったときは、保育のねらいを確認しています。ねらいさえ共有していれば、保育の内容が異なっても、大きな問題は生じませんから。ねらいが一緒ということは、子ども観や保育観もほぼ同じと考えることができます。

## 今後、実践を深めていくために

### 子どもの幸せを願い みんながハッピーになれる目標を

——今後、社会情動的スキルを伸ばすという視点から保育の質を高めようとする園は、どのようなことを心がけるといいでしょうか。

**秋田** まず、保育の質の向上を目指す限り、園から課題がなくなることはないとお考えください。課題を自覚して解決を目指すことが、保育の質の向上を支えます。自分の園には課題がなく、社会情動的スキルも十分に育っており、「今のままでいい」と考えるのなら、それ自体が問題と言えます。

保育の質を向上させるためには、保育者自身の社会情動的スキルを伸ばすことも大事です。保育者が異質な人と意見を交わし、他者との価値観の共通点や相違点を知り、自分のよさを自覚する。そして、それぞれの保育者が自立性を保ち、目標をもって、その人らしくふるまえる環境を園長が先頭に立って用意することが重要でしょう。

子どもたちの社会情動的スキルを伸ばすためには、前述したように、自園の子どもの実態に即し、自分たちの言葉で目指す姿を考えるといいでしょう。子どもを幸せにすることが保育の最終的な目的ですから、「こういう姿が見られたらすてきだよ」などと、できればみんながハッピーになれる目標をもって取り組みを深めていただきたいと思います。

**中山** 子どもの幸せのための保育という視点は、私も大事にしています。大多数の保護者は、幼児期には知的な教育を優先するより、優しさや協調性や自分らしさを育てたいという考えをもっています。それは、保護者自身もわが子に社会情動的スキルが育つのを望んでいることの表れでしょう。また、かつてはよい大学に進み、大企業に勤めるといったレールにのることがよいと考えられたこともありましたが、現代ではそれが幸せとは限らないことは、保護者もよくわかっています。そのことを考えても、今後は社会情動的スキルの重要性がますます高まるはずですよ。

世の中が忙しくなっていますが、案外、子どもも忙しいものです。社会情動的スキルを伸ばすためには、何かに没頭する十分な時間を保証することが不可欠と言えるでしょう。行事を厳選するなどして保育の活動が盛りだくさんにならないように注意し、子どもが自由に遊べる時間を確保するように努めたいと思います。

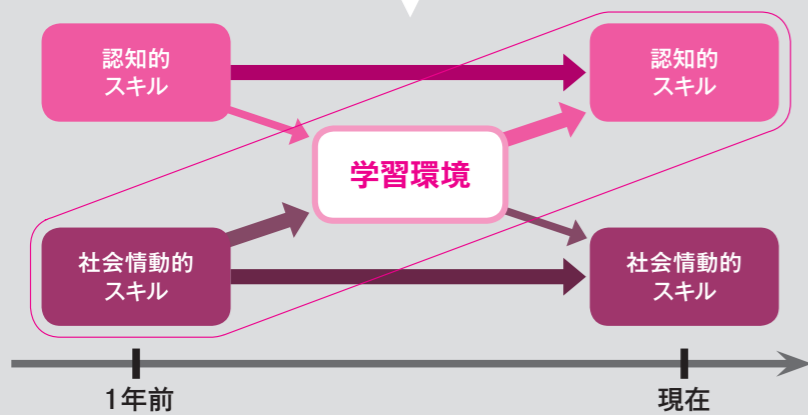
**太田** 私からは、今後心がけたいことをお話しさせてください。今日の座談会を通して、自園の保育目標である「自分で考えて行動できる子ども」「好きなことを見つけて楽しむ子ども」「自分もまわりの人やものも大切にできる子ども」は、社会情動的スキルという視点から考えても、よくできていると改めて気づきました。保育目標が掲げる子どもの姿を実現するために何をすべきかを考え、実践したいと思います。

——今後の幼児教育を考えるうえで非常に示唆に富むお話を多くいただきました。本日はどうもありがとうございました。

図4

### OECD発 幼児期に社会情動的スキルを育てる重要性

社会情動的スキルは、認知的スキルの形成の土台になる!



〈出典〉1. 米国 (NLSY,PSID):Cunha and Heckman (2008) and Cunha, Heckman,and Schennach (2012)  
2. 韓国 (KYPS):OECD (2015)

◎図の中の太い矢印は、細い矢印に比べ、強い関係があることを示します。社会情動的スキルのレベルが高いと、学習環境をより有効に生かすことができ、社会情動的スキルだけでなく、認知的スキルもさらに大きく伸びることがわかりました。社会情動的スキルは、認知スキルの土台となるというわけです。このことは、幼児期に社会情動的スキルを育むことの意味につながっています。

▶社会情動的スキルについてはP.12もあわせてご覧ください。

事例

# 子どもの未来につながる、 目に見えにくい「心」の育ちを見える化し、 保護者と共有

認定こども園 せんりひじり幼稚園 (大阪府・私立)

社会情動的スキルを育むために重要な遊びを通し、

「心」の成長を大切にせんりひじり幼稚園。心の育ちは目に見えにくいからこそ、保護者にわかりやすく伝える必要があると考え、写真や文章を使って表現する取り組みを始めました。その結果、保護者の保育への理解が深まり、一緒に子どもを育てる関係が生まれています。

## 保護者が子どもの育ちの見通しをもつようになった

### 成長が表れる場面を切り取り 写真と文章で具体的に伝える

せんりひじり幼稚園は、遊びを中心とした保育を通して、「心」を育てる教育に力を入れています。遊びの中で試したり、工夫したり、新たな発見をしたり、友だちと一緒に考えたり…といった多様な経験を通して、「心情・意欲・態度」は育つと考えているためです。そうした成長

の土台となるのは自己肯定感だと、園長の安達譲先生は話します。

「自分は自分であっていいという『存在することの自信(自己肯定感)』がしっかりと育つと、自分らしさを存分に発揮し、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じて、次第に『できること』の自信(自己有能感)が高まっていきます」

保育者は日々の保育を通して、自己肯定感をはじめとした心の育ちを



認定こども園  
せんりひじり幼稚園  
園長  
安達 譲先生

感じ取っています。しかし、子どもの発達段階について理解していない保護者には、目に見えない心の成長が伝わりにくいという課題がありました。そこで、園の方針と保護者の思いに齟齬が生じることを防ぐため、2012年から一人ひとりの「ポートフォリオ」を作成して成長の様子を伝えていきます(写真1)。

ポートフォリオは、子どもの成長が伝わる写真とともに、状況や子どもの思いを文章にまとめたもので、月1回作成して保護者に渡しています。吹き出しで子どもの思いや考えを表現するなどして、保育者が読み取った子どもの内面をわかりやすく伝えていることが特徴です。

もともとポートフォリオは、子

どもの理解を深める研修の一環として作成していました。

「写真を題材にして子どもの思いや成長について語り合う中で、保育者の子ども理解が進み、保育観も共有できました。この手法を活用すれば、保護者との間でも子どもに対する考え方や見方を共有できると考えました」(安達先生)

ポートフォリオで取り上げる場面は、友だちと話し合っている光景や、ひとり遊びに集中する姿など、それぞれの子どもの興味や性格、発達状況などに応じて選んでいます。

「保護者は、わが子のよさより心配な点が目につきやすいものです。そこで、保育者から見た子どものよさとして肯定的に伝えていきます。例えば、『友だちと活発に遊べない』と悩む保護者に、ひとり遊びに没頭する姿の写真とともに、『じっくりと集中できる姿がすばらしい』と伝えると、保護者は子どもを肯定的に捉え直します」(安達先生)

ポートフォリオを継続するうちに、保育者自身の意識も変化してきました。毎日、カメラを持って成長が表れている場面を探す中で、子ども理解が深まるとともに、子どもの姿を肯定的に捉える姿勢が強まったと言います。

若手の保育者も自信をもって取り組めるようにする育成や配慮も欠かしません。

「保育者が堂々と『子どものこの姿が良かった』と発信できるためには、『自分の考えを受け入れてくれる』と、同僚に対して保育者自身が安心感を抱いていることが大切です。そのために、子どもの捉え方や

写真の撮り方を教えるほか、新人研修などで気持ちの面のサポートも充実させています」(安達先生)

### 紙芝居を通して 年間の発達の流れを説明する

さらに2013年、子どもの発達の流れを具体的なイメージをもって理解してもらうため、年度初めの保護者会で紙芝居を使って子どもの成長過程を説明する試みを始めました。

紙芝居(写真2)は年齢ごとに、4月から3月までの成長の様子を写真と文章で表した作品です。ポートフォリオは個人に焦点を当てますが、紙芝居は各年齢の育ちを象徴する場面を取り上げています。この紙芝居はイチから作るのではなく、教育課程をもとにしているのが特徴です。

「次第に保育者との信頼関係に支えられ、自分らしく遊ぶようになり、いろいろな友だちや環境に出会って成長していく…。そんな子どもの育ちの見通しをもつことにより、子ども理解が深まり、保護者自身も育っていきます」(安達先生)

ポートフォリオや紙芝居を通し、園が大切にしている育ちについて説明することで、以前にも増して園と保護者との関係は良好になったと言います。保護者アンケートでは、園の方針について「よくわかる」「わかる」と答えた保護者は、以前は90%程度でしたが、情報発信を強化してか

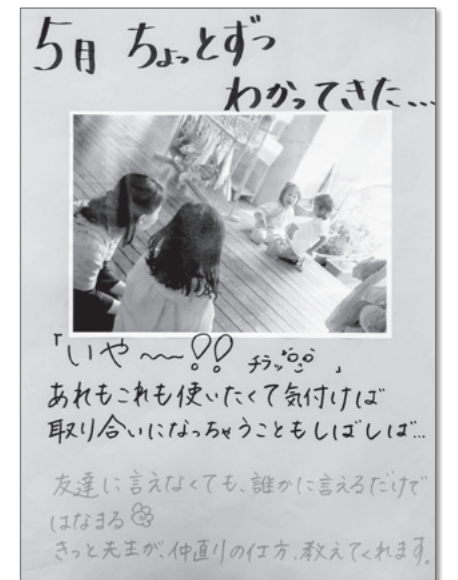


写真2●年間の発達の流れがわかる紙芝居  
発達過程を説明する紙芝居は、12カ月分を連続して見せて、育ちの見通しをもってもらいます。子どもの言葉などから、成長の様子が具体的にイメージできるようにしています。写真は3歳5月のもの。

らは95%以上に達しています。

「以前は、園の考えや子どもの姿が十分に理解されていないことから、指摘や要望、場合によっては苦情につながることもありましたが、いろいろな理解が深まった今は、園と保護者の双方と一緒に子どもを育てているという感覚が強まっていると感じます」(安達先生)

園では、今後も情報発信を通して思いを共有する取り組みを大切にしていこうと考えています。

「保育者の中に『子どものすてきな姿を発信することが楽しい』という気持ちがなければ、取り組みは深まりません。園全体で子どもを肯定的に捉える風土をより強めていきたいと思います」(安達先生)

### 認定こども園 せんりひじり幼稚園

○ 1923(大正12)年に創立のひじり幼稚園の姉妹園。 園長 安達譲先生  
創立以来、遊びの中の学びを通し、自己肯定感とともに 所在地 大阪府豊中市新千里北町3-2-1  
生きる力を育てる「心」の教育を実践している。 園児数 435人(3~5歳)

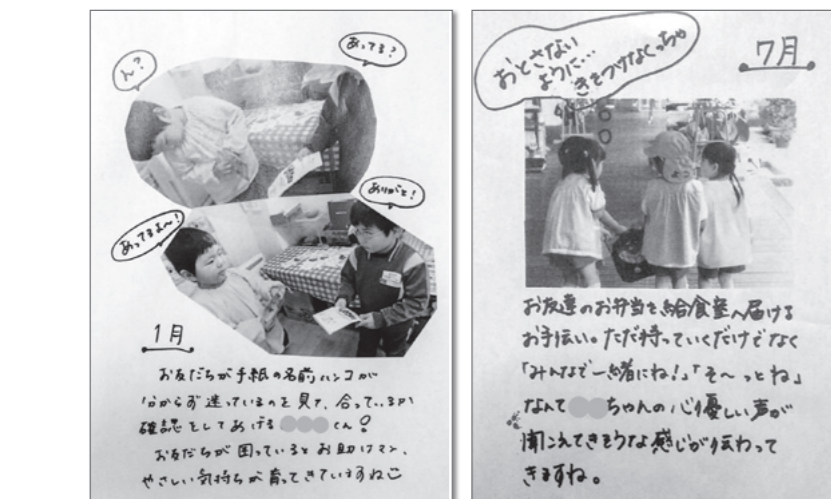


写真1●子ども一人ひとりの「ポートフォリオ」  
吹き出しなどを用いて子どもの内面が見えるように表現し、心の成長を伝えます。保護者に子どもの姿を伝えるとともに、園が大切にしている保育方針への理解を促すこともねらいます。

ベネッセ教育総合研究所・OECD共同シンポジウム

# 今注目される「社会情動的スキル」について 世界と日本の最新の知見を報告するシンポジウムを開催しました

幼児期・児童期に育てるべき資質・能力として世界的に関心が高まる「社会情動的スキル」。その最新の研究成果を発表するシンポジウム「子どもの未来につながる社会情動的スキルとは？それを育む環境とは？」が、2015年3月13日、東京大学内福武ホールで開催されました。当日の講演やパネルディスカッションの様子を紹介します。



## 第1部 世界における社会情動的スキル研究報告

パーソナリティ心理学を研究するカリフォルニア大学バークレー校のオリバー・P・ジョン博士、ならびにOECD教育スキル局の宮本晃司氏のお二人が、社会情動的スキルに関する最新の知見を報告しました。

### 子どもの未来につながる社会情動的スキルとは？



**オリバー・P・ジョン博士**  
カリフォルニア大学  
バークレー校心理学部教授

#### ◎社会情動的スキルは5つに分類できる

社会情動的スキルは多様で複雑であり、ある研究者は160のスキルを挙げるほどだ。それを統計的に分類すると、「Openness（開放性）」「Conscientiousness（勤勉性）」「Extraversion（外向性）」「Agreeableness（協調性）」「Negative Affect vs. Emotional Stability（否定的感情 vs. 情緒安定性）」の5つに分けられ、これらは「ビッグファイブ」、またはそれぞれの頭文字から「OCEANモデル」と呼ばれる。

#### ◎社会情動的スキルをどう測定するか

社会情動的スキルは、相対的にIQとは関連がない（無相関）。また、多くの研究者によって見いだされており、文化や言語コミュニティを超えて存在していることなどが特徴と言える。測定方法には、質問紙調査や実験、面接、観察などがある。5歳から7歳は、協調性や勤勉性が高まる重要なタイミングのひとつであり、測定時期として適している。また成人としてのアイデンティティを形成し始める10歳から18歳も重要だ。10代は協調性と勤勉性が低下する傾向があるが、大学生になる頃にもとに戻ることも多い。

### 社会情動的スキルを育む環境について



**宮本晃司氏**  
OECD教育スキル局・  
「教育と社会発展」事業マネージャー

#### ◎社会情動的スキルの形成過程は登山に似ている

社会情動的スキルの形成過程は、山登りに似ている。登山の前には、最低限の登山ルート・天候の情報、健康状態の把握といった認知的スキルに加え、勇気や自信などの社会情動的スキルが求められる。登山の過程でこれらのスキルはさらに強化され、困難が増すほど、コミュニケーション、注意力、忍耐力などのスキルも形成される。無事に山頂に到達したら、登山メンバーとともに体験を振り返り、学んだことを振り返ることにより、さらに社会情動的スキルが定着していく。

#### ◎園・学校、家庭、地域の3方向からのアプローチ

社会情動的スキルは段階的に形成されるため、持続的な教育投資が有効だ。初めのスキルが大きいほど、その後の新たな教育環境を有効に生かすことができ、さらにスキルが発達する。つまり、幼児期に社会的にも教育投資を行い、このスキルを早期から育成することは非常に重要だ。社会情動的スキルの育成は、園・学校、家庭、地域の3つのベースが考えられる。特に家庭ベースでは、家庭内の行事や習慣を通して、親子のアタッチメント（愛着）を強化することが基本となる。

## 第2部 日本における幼児期の「学びに向かう力」研究報告

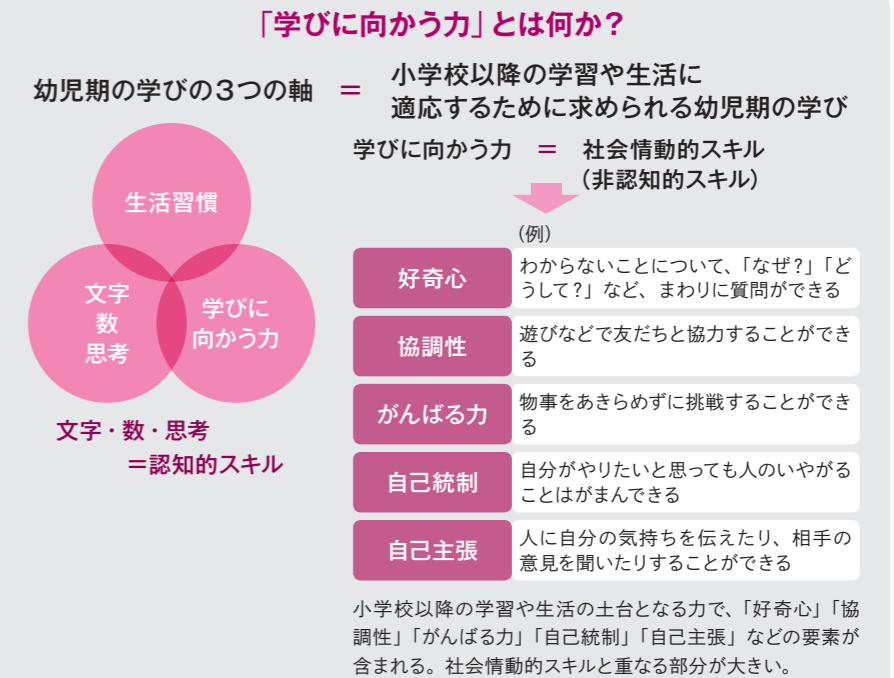
日本の保育現場において、社会情動的スキルに通じる「学びに向かう力」は、どのように育まれてきたのでしょうか。ベネッセの調査結果に続き、保育の研究者が現状の分析と今後の課題を提示しました。

### 「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」報告（2014年）



**高岡純子**  
ベネッセ教育総合研究所  
次世代育成研究室 室長

幼児期から小学1年生の保護者を対象として、家庭での生活習慣や養育態度がどのように「学びに向かう力」に影響しているかを調査した。その結果、「3歳児において基本的な生活習慣をもつことが大切」「小学校以降の学習の土台となる文字・数・思考の力は、その前提に学びに向かう力の育ちがあり、それを幼児期に育成することが重要」「幼児期の生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考の力には、保護者の養育態度が影響する」「親子で一緒に行う知的なやりとりの遊びは、学びに向かう力と関係がある」ことが明らかになった。



## パネルディスカッション「幼児期に望ましい学びと環境とは？」



**秋田喜代美氏**  
東京大学大学院教授

日本の保育は、これまでも社会情動的スキルに通じるエモーショナルな力を重視してきた。だからといって、これまで通りの保育でよいわけではなく、グローバル化、少子化などの社会の変化に合わせて保育現場も向上していかなければならない。



**大豆生田啓友氏**  
玉川大学教授

社会情動的スキルを育成するうえで、子ども主体の協同的な活動がますます重要になる。ある園では、草花の汁を用いた香水作りを通し、子どもどうしが対話し、探究していた。協同的な学びが生まれる保育のあり方が全国の現場で模索されている。



**無藤隆氏**  
白梅学園大学教授

幼児期は喜怒哀楽を十分に感じたうえでプラスの感情に転化することで情意（情緒）の育ちをもたらすことが大事だ。幼児教育は、子どもを自覚へと向かわせ「言葉」を与える教育と考えられ、自覚に至るプロセスで大切なのが「対話」である。

### 今、なぜ社会情動的スキルが求められているのか。

**宮本氏** 個人のみならず、国家の形成の根幹となるもので、これまでも重視されてきた。ここ数年、研究の進展によって多くのエビデンスが登場し、育成のノウハウがまとまってきたため今注目を集めている。

**大豆生田氏** 昔から日本では社会情動的スキルの育成が行われてきたが、さらに力を入れる必要がある。幼児教育に目に見える成果を求める風潮もある中、その方法や成果をどう提示できるかが課題だ。



# 「学びに向かう力」を育む 家庭の関わり

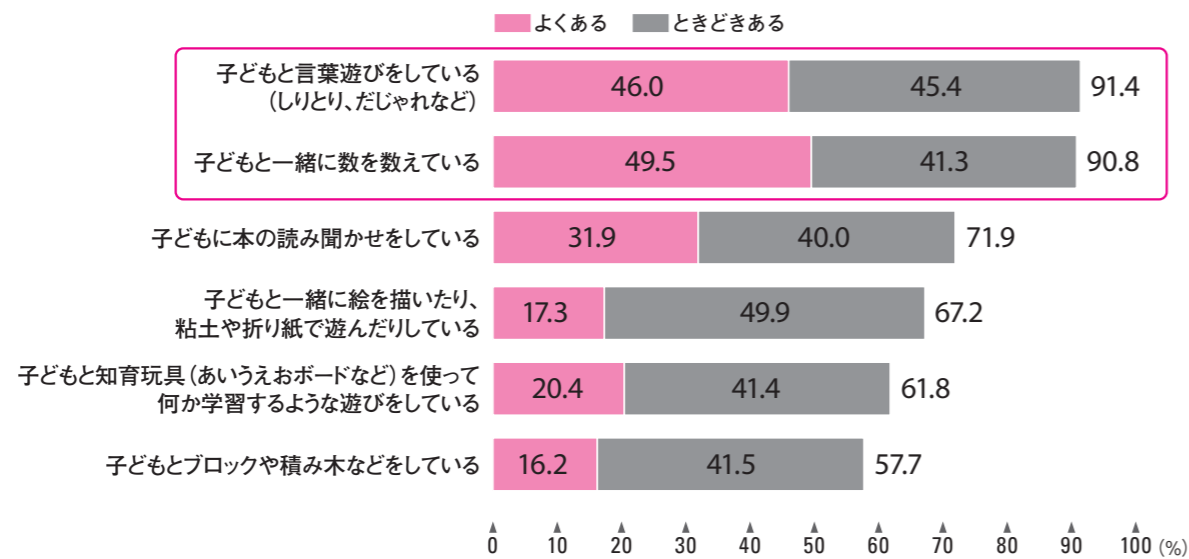
ベネッセ教育総合研究所は、4～5歳児をもつ保護者を対象に、2014年1月に「**幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査**」を実施しました。この調査の目的は、3歳児期から小学1年生までの4年間、同一の子どもについて継続して、子どもの学びの様子や、母親の意識を捉えることで、この時期に大切な子どもの育ちや保護者の関わりを明らかにすることにあります。今回は、この中から4～5歳児の調査をご紹介します。

**引用・転載時のお願い** 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査（4～5歳児）」（2014））。

## 母親が5歳児の子どもと言葉遊びをしたり、一緒に数を数えたりする割合は約9割。

**Q** 日頃、お子さまとの生活の中で、あなたは以下のことについて、どれくらいしていますか。

図1 日頃、親子でやりとり遊びをする頻度



**研究員解説**

追跡調査の第2弾となる今回の分析では、保護者の養育行動と子どもの発達との関連性を調べるために、教育的な内容を含む親子での遊びや読み聞かせなどの養育行動を「知的なやりとり遊び」（以下やりとり遊び）と総称して分析しました。「やりとり遊び」とは、ここでは図1で示す6項目を指しています。

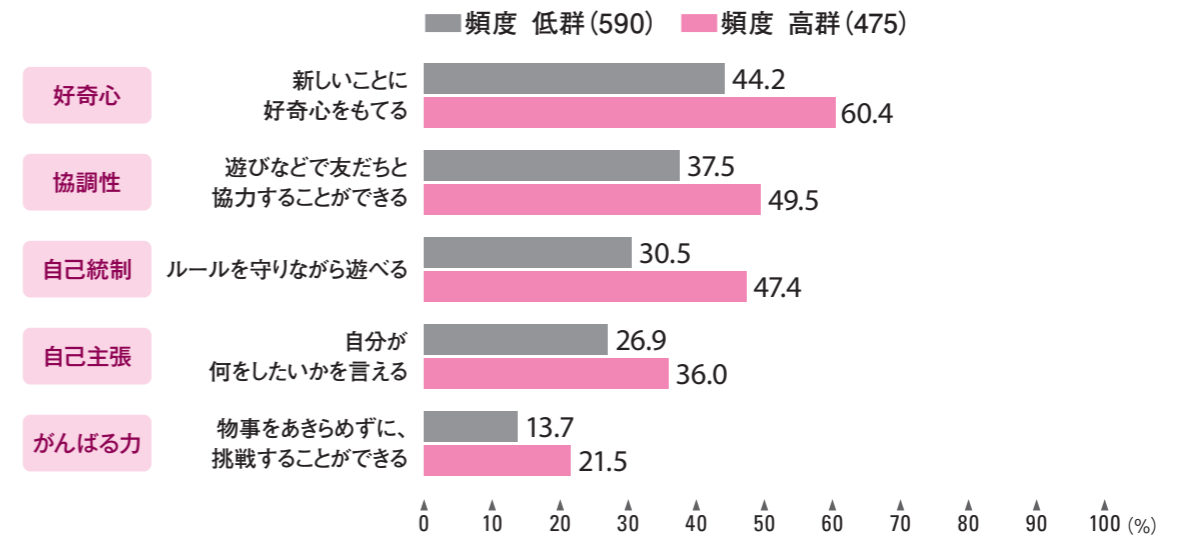
図1からは、多くの母親が5歳児の子どもと一緒に、言葉遊びをしたり数を数えたり、一緒にお絵かきをしたりするなど、やりとりを伴うような多様な遊びをしていることがわかりました。 ※本分析では、回答者の99.7%が母親であったため、母親に限定して分析をしています。

真田美恵子研究員◎ベネッセ教育総合研究所主任研究員。幼児教育・保育や子育てなど、就学前の園や家庭を対象とする調査研究に携わる。

## 親子で“知的なやりとり遊び”をよくする家庭の方が、5歳児の「学びに向かう力」「文字・数・思考」の力が高い。

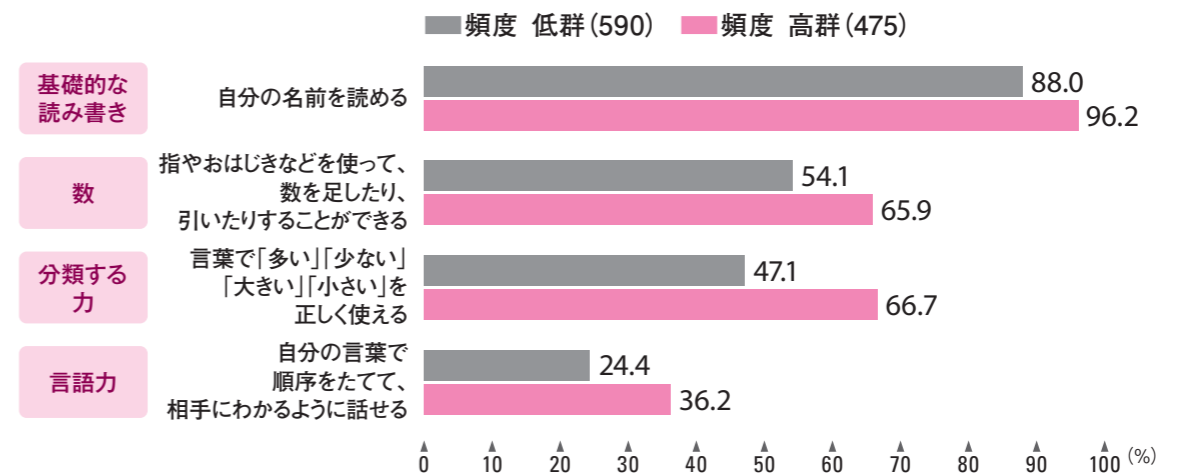
**Q** 現在、お子さまは以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図2 5歳児の「学びに向かう力」（親子のやりとり遊びの頻度別）



※「とてもあてはまる」の割合。  
※「学びに向かう力」は、5つの領域(好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力)に関わる24の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。  
※「やりとり遊びの頻度(低群・高群)」は、5歳の子どもの遊びや読み聞かせ(図1で示した6項目)について、「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として合計値を得点化し、サンプル数がほぼ等分になるように2区分した。1項目でも無答不明の人は除く(以下同)。

図3 5歳児の「文字・数・思考」（親子のやりとり遊びの頻度別）



※「とてもあてはまる」の割合。  
※「文字・数・思考」の力は、4つの領域(基礎的な読み書き・数・分類する力・言語力)に関わる23の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。

**研究員解説**

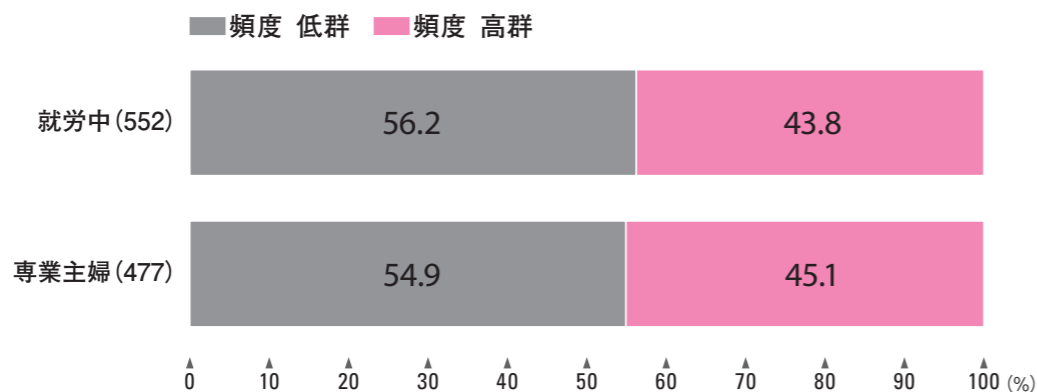
「やりとり遊び」と子どもの発達との関連性について、やりとり遊びの頻度が低い群と高い群に分けて調べました。図2は、好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力といった、学びの土台となる「学びに向かう力」との関連性を見たものです。例えば「新しいことに好奇心をもてる」割合は、やりとり遊びの頻度が低群の子どもでは44.2%、高群の子どもでは60.4%と、高群の方が

約16ポイント高くなっていました。図3は、「文字・数・思考」の力との関連性を見ています。例えば「自分の名前を読める」割合は、低群の子どもでは88.0%、高群の子どもでは96.2%と約8ポイントの差が見られました。やりとり遊びの頻度が高群の家庭の子どもの方が低群よりも、「学びに向かう力」「文字・数・思考」の力の数値（「とても」の割合）が高い傾向が見られました。

## “知的なやりとり遊び”の頻度は、 母親の就労の有無や最終学歴によっては変わらない

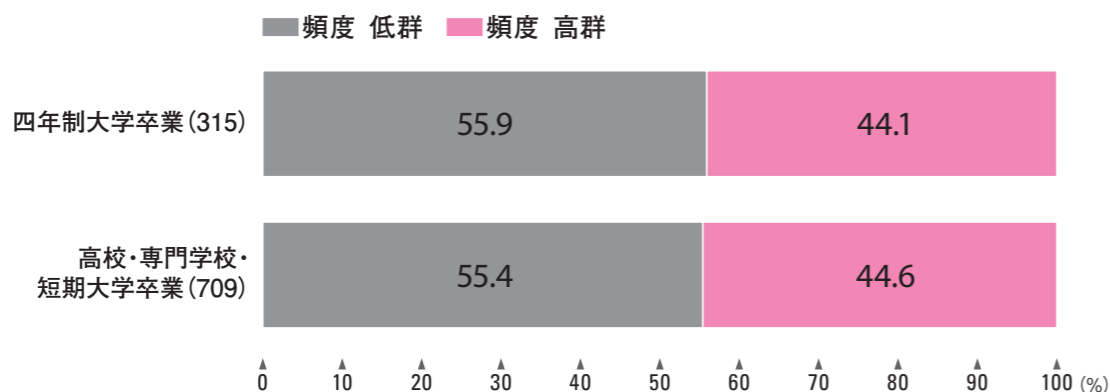
**Q** 日頃、お子さまとの生活の中で、あなたは以下のことについて、どれくらいしていますか。

図4 やりとり遊び頻度 (母親の就労の有無別)



※就労中は「正規の社員・従業員」「派遣・契約社員」「パート・アルバイト」「フリー(自営業・在宅ワークを含む)」を含む。

図5 やりとり遊び頻度 (母親の最終学歴別)



※「高校・専門学校・短期大学卒業」には「中学校」「高等専門学校」卒業を含む。また「四年制大学卒業」には「大学院(六年制大学を含む)」卒業を含む。

### 研究員解説

図4は、やりとり遊びをする頻度と就労の有無との関連性を見たものです。やりとり遊びが高群の割合は、母親が「就労中」の場合で43.8%、「専業主婦」の場合で45.1%と、ほぼ差がありませんでした。同様に、母親の最終学歴とやりとり遊びの頻度の関連性を見たものが図5です。頻度が高群の割合は、母親の最終学歴が「四年制大学卒業」の場合で44.1%、「高校・専門学校・短期大

学卒業」の場合で44.6%と、こちらもほぼ差がありませんでした。やりとり遊びの頻度は、母親の就労や最終学歴といった家庭の状況に関わらないことが明らかになりました。

また、やりとり遊びをよくする母親の方が子どもや子育てに対する肯定感が高いこと、子どもを尊重したり、子どもの思考を促したりするなどの態度をとる割合が高いことも、本調査からわかりました(図表略)。

出典:「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査(4~5歳児)」(2014)

調査対象:4歳児~5歳児をもつ母親 1,074名

調査時期:2014年1月

調査地域:全国

調査方法:郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査項目:子どもの生活時間/子どもの学習準備/母親の養育態度/母親の関わりなど

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご利用ください。▶ <http://berd.benesse.jp/>

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

## 子どもとの時間を楽しむ中で 学びの土台が育まれていく



今回の調査は、家庭で行われるやりとり遊びの頻度、そしてやりとり遊びと、小学校以降の学習の土台になる「学びに向かう力」との関係などを明らかにしました。これを踏まえて、家庭でのやりとり遊びを園はどのように支援するとよいか、目白大学人間学部子ども学科の荒牧美佐子先生にうかがいました。

目白大学 人間学部 子ども学科専任講師

### 荒牧美佐子

あらまき・みさこ

専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。

### やりとり遊びには 特別な知識やスキルは不要

今回の調査では、多くの母親が子どもと言葉遊びをしたり、一緒に数を数えたりといったやりとり遊びをしていることがわかりました(P.14図1参照)。また、やりとり遊びの頻度と、母親の就労の有無や最終学歴は相関がないことも明らかになりました(P.16図4・5参照)。幼児期のやりとり遊びは、保護者に特別な知識、時間をかけた準備やコストが必要なものではありませんから、日常生活の中で子どもに関心を持ち、自然に関わっていく中でどの保護者にもできるものと言えるでしょう。

そしてやりとり遊びの頻度が、子どもの「学びに向かう力」や「文字・数・思考」といった、小学校以降の

学習の土台となることが確認できました(P.15図2・3参照)。

### 義務で取り組むのではなく 楽しむことが大切

やりとり遊びは「こういう手順でやらなければいけない」といったものではありません。大切なのは、親子で楽しむことです。ですから、保護者に対して「学びに向かう力を育むために、やりとり遊びをしてください」とあまり強く求めすぎると、家事や仕事で忙しい中で「毎日〇分やりとり遊びをしなれば……」と、いつの間にか遊びが義務になってしまい、保護者にとっても子どもにとっても楽しい時間ではなくなってしまおう。園からは、保育者が子どもたちとふだんやっているや

りとり遊びの例を紹介しながら、「親子で楽しむことが一番大切です」と気軽に取り組めるようにアドバイスしていただきたいと思います。

やりとり遊びは、「小学校の勉強の先取り」などではありません。成果を求めたり、ゴールを設定したりせずに、園で覚えた遊び歌と一緒に歌いながら、言葉のリズムを感じるなど、あたたかな親子関係の中で楽しむものであることを、遊びの中の学びを支援する保育者のみなさんから伝えてください。

子どもが「学びたい、知りたい」という意欲や、粘り強く取り組もうとする気持ちは、日常生活で保護者と深く関わったり、友だちと遊んだりする中で育まれていくものです。そして、幼児期における「学びに向かう力」と「文字・数・思考」の力は、くっきりと分かれているものではなく、互いに関連し合って存在し、そして子どもの内面で統合的に伸びていくものです。どれかひとつを選んで伸ばしていくようなものではなく、愛情をもって保護者が関わることで、バランスよく伸びていくものだというところを、保護者のかたに理解していただくことはとても大切だと思います。そして、保護者のかたがやりとり遊びを通して、子どもを興味深く見つめていくことで、その成長や変化をより敏感にキャッチできるようになるでしょう。



# 幼児期の「運動」は 体だけでなく、心も育てる

世界的に幼児期の運動遊びの大切さが見直されており、日本でも幼児期運動指針などを通し、運動遊びの実践がより求められるようになってきました。ところが、運動遊びの時間を十分に保証できていない園は少なくなく、以前に比べて子どもの運動量が減っているという現状があります。子どもの心身の育ちにおける運動遊びの大切さについて、今一度、見つめ直してみましょう。

## インタビュー

### 幼児期における運動への関わり方が 心身や知的な成長を大きく左右する

幼児期の運動遊びは、子どもの心や体の発達にどのように結びつくのでしょうか。また、運動遊びを効果的に行うには、どのような点に気をつけるとよいのでしょうか。東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。

#### 運動遊びは体だけではなく 心や感覚の育ちを支える

日本の保育は、伝統的に戸外遊びを大切にしてきました。児童心理学者の倉橋惣三が述べたように、戸外での運動遊びは体力・運動能力の向上に加え、心や感覚などの総合的な育ちにつながるという考えが根底にあります。海外では、運動は「～ができる」といった目に見える行動をベースに考える場合が多いのですが、日本では「心情・意欲・態度」につながる生活の基盤として捉えられてきたことが特徴でしょう。

もっとも、運動遊びの大切さを経験的に知っていても、その理由をはっきりと意識する機会はあまりないかもしれません。そこで体を動

かすことが子どもの育ちにどう影響するのかを考えてみましょう。

幼児期の成長は、認知的スキル・社会情動的スキル・運動スキル（体力・運動能力）の3つが相互に関連してもたらされると考えられます（P.19 図1 参照）（社会情動的スキルについては、P. 2～参照）。運動遊びが心の育ちや意欲の形成につながり、知的な発達を支えると考えられているのです。

#### 幼児期に運動の喜びを知れば 生涯にわたり運動が好きになる

鬼ごっこを例に考えてみましょう。まず夢中で走り回ることで脚力や身のこなし、持久力などが育ちます。持久力は体力面だけではなく、がんばる力ややり遂げる力にも

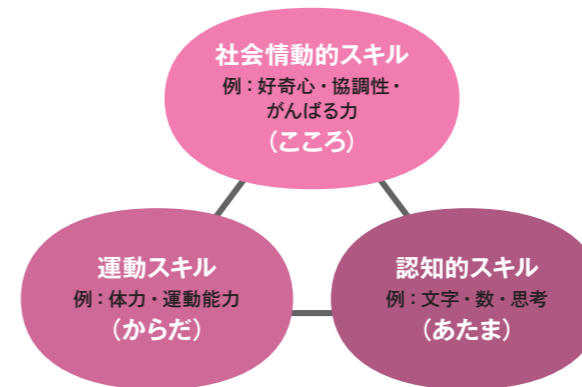


東京大学大学院教授  
**秋田喜代美**

あきた・きよみ

東京大学大学院教育学研究科教授。日本保育学会会長。内閣府子ども・子育て会議委員。厚生労働省社会保障審議会委員。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の温もり』『続 保育のみらい』（いずれもひかりのくに）など。

図1 認知・社会情動・運動の関係図



なり、いろいろな活動に諦めずに取り組む力につながります。

鬼ごっこは、みんながルールを守らなくては成立しません。そのため、自分の気持ちを調整する力が求められますし、互いにルールを守って遊ぶ中で信頼感が育まれ、人間関係が培われていくでしょう。

大人も同じですが、体を動かすと気分転換になり意欲がわきます。生活リズムが整い、日常のあらゆる活動に前向きな気持ちが生まれます。また、運動遊びが楽しくなると、「もっとこうしてみたい」といった目当てが自然に生じます。新しいことができるようになったり、相手に勝ったり、運動遊びの結果は見えやすく、目当てをもつことの喜びを知り、有能感や自信にもつながります。

このように捉えると、運動遊びが子どもの心身、そして知的な発達に欠かせないということがご理解いただけるでしょう。特に幼児期は体の諸機能の調整力が最も大きく伸びるため、運動全般の基本的な動きを身につけやすい時期です。気持ちの面でも、幼児期に運動の楽しさや心地よさを実感すれば、生涯にわたって運動を好きになりやすいでしょう。

文部科学省の幼児期運動指針では、「身体活動の合計が毎日60分以上」を推奨しています。これには生活の中でのさまざまな動きも含まれます。

日本の保育は屋外遊びを重視してきましたが、現在、十分な運動遊びを保証できていな

い園も少なくありません。背景には、園庭の狭小化や遊び場の減少、少子化、遊びの質の変化などに加え、保護者の安全意識の高まりを受けて遊びを制限するケースも見られます。また、幼児期は自由な遊びの中で楽しく体を動かすことが大切ですが、「特定のスポーツをしていればよい」といった誤解が一部にあるように見受けられます。こうした状況は、保育にわかりやすい結果を求める風潮の表れとも言えるかもしれません。

#### 保護者にも情報を発信して 全ての子どもの運動を保証

今後、運動遊びの重要性を見直し、どの園でも意識して体を動かす時間を確保することが望まれます。その際に心がけたいのは、全ての子どもの運動遊びの時間を保証することです。屋内での遊びを好む子どももいますので、例えばみんなで屋外で遊ぶ時間を設定し、その中で意欲を引き出す言葉かけを行い、体を動かすことの楽しさを伝えるとよいでしょう。同時に、思い思いに体を動かす自由な遊びの時間も確保します。

マットがあっても、保育者がそこで遊びを示さない限り、遊びは広が

りません。しかし最初に、マットを使ったみんなで行う活動を設定すれば、自由遊びの時間にマットを使った遊びのアイデアが広がり、家庭でも布団を使って遊びたくなるかもしれません。

園庭が狭くて外遊びがしづらいついた声も聞きますが、屋内でも運動する工夫はできます。室内遊びに体を動かす要素を入れるほか、全身運動となる雑巾がけなど生活の中の動きを見直してみましょう。

子どもが意欲的に遊ぶためには、禁止事項を設けすぎないことも大切です。事前に園内の危険な箇所などをチェックし、事故を防ぐ安全管理をしたうえで、過度に制限を設けないようにします。自由さが確保された環境で、子どもは「これ以上の高さから飛び降りるのは危ない」「小さい子がいるから、こっちはボールを蹴らないようにしましょう」などと、自分で判断して遊ぶようになります。また、大きなケガをしないためには、ときには運動遊びの中でカスリキズにより危険を察知する意識を育てることも必要でしょう。

最近、休日に体を動かさないため、生活リズムが崩れ、月曜日に疲れを訴える子どもが増えています。屋外での遊びが総合的な育ちにつながることを保護者にも説明し、家庭で積極的に体を動かすように促すことも大切です。

幼児期の運動遊びを通して体を育てることが、生涯にわたる健全で幸せな生活につながることを園と家庭でも共有し、子どもが楽しめるかたちで運動遊びを充実させたいですね。

事例

# 一斉活動で体を動かす時間を確保しながら 生活の中にも運動の要素を十分に取り入れる

玉島幼稚園（大阪府・公立）

玉島幼稚園では一斉活動や自由遊び、さらに生活の中の運動遊びを充実させた結果、子どもたちは進んで体を動かすようになり、運動以外の活動にも集中して取り組む姿が見られるようになりました。

## 運動を通して体と心を育てることが前向きな気持ちを育む

### 到達目標を設定せず 個々の力を伸ばす援助

玉島幼稚園は辰本房江先生が園長に赴任した2012年から運動遊びを充実させています。子どもたちがよく転ぶ、疲れやすい、ケガをしやすいなどの課題を感じたためです。体を動かす経験が不足し、入園まですべり台やブランコで遊んだことがない子どももいたため、体力や身のこなし、集中してモノに関わる力などを育てるため、1日60分間を目標に体を動かすようにしました。

4歳児は体を育てることに重点を置き、5歳児は友だちと一緒に楽しんだり高め合ったり協同性を育てる活動を展開します。「いつまで

に〇〇をできるようにする」といった到達目標は設けていません。

「到達目標を設けると、運動が苦手な子どもにとってつらい時間となり、ますます運動嫌いになりかねません。『その子ができることを、もっとできるように』という気持ちでサポートをしています」(辰本先生) すべり台を怖がる子どもは、保育者が抱いてすべるなどして安心させて、「もっとやりたい」と思える援助を心がけています。また、がんばったとき、誰かに教えようとしたときなどはほめて、意欲を引き出しています。

「『やればできる』という気持ちが芽生えたらしめたもの。その後も小さな変化をほめて、徐々に自信を高



園長 辰本房江先生

めるように援助します」(辰本先生)

### 運動以外の活動でも 集中力が高まった

園では真夏を除く毎日、午前中にマラソン、体操やダンスをしています。マラソンは4歳児と5歳児の子どもが一緒になって自由なペースで走り、疲れたら歩く子どももいます。5歳児で5分間、休まずに走れることを全体の目安と考えています。

さらに週1~2回、雑巾がけとリトミックをしています。

「雑巾がけは、大人でも大変な全身運動ですので、初めは前に進めなかったり、顔を打ってしまったり、うまくできない子どももいますが、ほとんどの子どもができるようになります」(辰本先生)

廊下には、けんけんば遊びのマー



子どもにとってマラソンは楽しい時間。音楽が流れ始めると園庭に飛び出して走り始めます。トラックの内側を走る4歳児も夏休み明けからは5歳児と合流して一緒に走ります。



生活の中の運動遊び

←自分がねらった場所にまっすぐと手を伸ばして当てる練習。5歳になると、ジャンプしてタッチします。  
→両足で思いきりジャンプしなければ届かない程度の高さに吊るしています。

↑多くの子どもがけんけんばをして廊下を通過していきます。

→トイレの順番は片足立ちで待ちます。強制ではありませんが、習慣になっている子どももいます。

↑跳んだ距離が数字で分かるので、目標をもってチャレンジする姿が見られます。

→廊下の端に巧技台が置いてあり、腕で体を支えるなどして遊んでいます。

クが書かれ、ジャンプするとタッチできる高さに目標物がつるしてあったり、立ち幅跳びを測定する線も書かれていたりして、子どもたちは移動中や自由遊びの時間に遊んでいます。トイレの前には片足の足跡マークが書かれており、片足立ちで順番待ちをする子どもが見られます。

また登園時は園長先生が門に立ち、一人ひとりの子どもと「おはようタッチ」をします。

「自分がねらった場所にまっすぐと手を伸ばして当てるのがねらいです。5歳になると、ジャンプしてタッチするようにします」(辰本先生)

運動を習慣化するために、保護者にも協力を求めています。運動能力調査の個人結果の返却時などに、体を動かすことの大切さを伝え、「買い物ときは子どもに荷物を持ってもらいましょう」「リュックを背負うと背筋が鍛えられます」といった

アドバイスをしています。「保護者は、運動を不要とまでは思っていないませんが、知育などに比べて優先順位を低く捉えがちです。しかし、運動が心や脳の発達と関連していることなどを伝えると重要性を理解してもらえます」(辰本先生)

運動遊びの充実を図ってから、体力や基本的な身のこなしが身についたことで、体を動かすことが好きな子どもが増えました。運動中に転ぶ姿が減ったほか、危険を察知し回避する力もついて、小さなケガが目に見えて減りました。

運動以外の活動に対する集中力も高まってきています。

「思いきり体を動かして部屋に入ると、落ち着いた気持ちで活動できています。『動』が満たされると、あわせて『静』も充実するようです」(辰本先生)

これからも一人ひとりのよさを伸ばす支援を大切にしながら、運動遊びを充実させていく方針です。

「運動遊びを通し、体とともに心を育てることが、小学校以降で運動だけではなく、いろいろなことにチャレンジする前向きな気持ちにつながると思っています。さらに幼児期に体を動かすことの喜びを知り、その気持ちを生涯もち続けてほしいと願っています」(辰本先生)

### 玉島幼稚園

○「一人ひとりが自分らしさを発揮しながら、仲間とともに育ち合う子どもを育てる」を目標に掲げている。思いきり体を動かす生活を習慣づけ、健康な心と体を育てる保育が特色のひとつに挙げられる。地元の保・幼・小・中との交流活動にも力を注ぐ。

園長 辰本房江先生  
所在地 大阪府茨木市平田2-36-4  
園児数 82人(4~5歳、定員175人)

PDF版では裏表紙写真を公開していません。ご了承ください。

表紙／裏表紙

大阪府 ● 認定こども園 せんりひじり幼稚園

## 『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

次号(新春号)は2016年1月上旬～中旬発刊(予定)です。

※「これからの幼児教育」は年2回の発行に変更しました。